

自身苦に遇て、世の非常を覺るに六道同じく然なり、心を安ずるにこれ地（よりどころ）有ること無きを明す。此は仏説の浄土の無生を聞きて穢身を捨てて彼の無為の楽しみを証せんと願う。

（『観經序分義』「欣淨緣」、定本親鸞聖人全集第九卷八三頁）

第5組 敬徳寺住職

中岡 明秀

text by Nakaoka Myosyu

この身このままのお助け（下）

救われた事実は、私にまで伝えられた仏道の歴史の内に、この人を見い出せるかと云う問いかけであろう。

聞かずにおれないもの

“おのおの十余カ国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころごし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。”

（歎異抄第二章）

この言葉から、聞かずにおれないと云う意欲と内面からのうながしが伝わってくる。

「念仏を称えれば地獄に墮ちる」と云われ惑わされる自身の心を見たのである。その心を尋ねずにはおれないと云う意欲である。

内面からのうながしとは、仏道の歩みからの勧めである。不安におののく自らを率いて聞け、聞いてきた事に自らを正せ、と。

“「我一心」は天親菩薩自督（督 反〔アキラカナリ〕 字 勸也 率也 正也）の詞なり”（聖典 168 頁・1032 頁）という天親菩薩の言葉が道を尋ねた人の上に成就している。

このおばあさんも又、聞かずにおれない苦悩をかかえて、お寺に参ったのである。

それは、縁にふれて吹き出してくるあの言葉「私はあの小煩い姑さんによく仕えてきた。今の嫁さんは云う事を聞かん。」である。

これは、自己表白である。お寺、仏まします処で仏に向かって問うたのであろう。こんな自我に苦しむ身を持って、生きていける世界を聞いていきたい、

と云う願いがあある。

この身このままのお助け

“自身苦に遇て、世の非常を覺るに六道同じく然なり、心を安ずるにこれ地（よりどころ）有ること無きを明す。此は仏説の浄土の無生を聞きて穢身を捨てて彼の無為の楽しみを証せんと願う。”（『観經序分義』「欣淨縁」）

阿闍世の逆害によって、無常の世を私の思いの中を生きて苦しんでいる自分が明らかになった。それは、自分を変えることも出来ないし逃げ込む処もない。その世界を生きる以外に無いと覺るのである。

蓬茨先生から二種深信は一面二種とお聞かせいただいた。表裏と云う事であろう。一句目と二句目は、そう云う意味であろう。

“此は”苦なる世界に身をおく以外にないと云う自覺は、「そのまま」仏に出遇い愁憂を背負っていける身になるためであったと云う意欲を生み出している。

“仏説の浄土の無生を聞いて”

仏が説くのは、高邁な教理ではない。説く事は仏陀自身のありのままである。さらに云えば、いま韋提希の前にいる事の意味を説く。“聞いて”聞いたのは韋提希自身である。私のために、この苦悩の世界に身を没して下さったと云う歡喜であろう。欣淨縁に仏日と云う表現があるが、仏の別名ではない。私の闇を破って下さったと云う、韋提希の礼拝・讚嘆の言葉であろう。韋提希の礼拝・讚嘆によって、仏陀は苦悩の世における仏陀（世尊）となる。

仏陀と韋提希の出遇いの中に尋ねれば、このおばあさんの歩みも又明らかになる。

“この身このままのお助け”布教師の言葉に仏の声を聞いたのである。私を矜哀する仏に出遇うたのである。“御無理御もつともナンマンダブツ”自身への悲歎と仏への讚嘆であろう。仏はおばあさんの上に苦悩の人を見、おばあさんは私を矜哀して下さる仏と讚嘆しているのである。

矜哀の心と賛嘆の心が、互いに呼応して念仏の声となって響いている。仏はおばあさんを、おばあさんは仏を互いに知り尽くし、信じ、敬うところの相い念じあう出遇いである。そこに、青色青光、黄色黄光の世界が示現している。